

『人生ハンド伝』10月号（79）【日本人が置き忘れた、大切な忘れ物】

相も変わらず、昨今の非人道的なニュースに接する度、私はいつも、日本人は「恥の文化」をどこかに失ってしまったのではないかと慨嘆します。かつて我等の祖先は「恥」という概念を大切にして生活していたように思います。では、その「恥」という文化をいつごろ手に入れたのか、調べてみました。キーワードは「お天道様」にありました。言うまでもなく農業の営みは太陽に左右されます。その自然の恵みである太陽に、日本人が畏敬の念を抱きました。つまり農耕社会だった日本には縄文・弥生の昔から「恥」の意識があり、この感性が私達の細胞にまで染みこんで「恥の文化」が出来上がったようです。

1つ例を挙げるとすれば、先頃とんでもない事件がありました。それは、世に言う進学校で、「歴史」の履修（授業）を義務づけられているはずなのに、大学入試科目に「歴史」が無いからという理由で、授業を行なっていないかった有名校が、1校だけではなく続出してしまいました。こんな教育をしていたのでは、あたかも他人の見ていない所では、何をしても良い。人の物を勝手に盗んでも見つからなければそれで良いという程の恐ろしいことであり、本来は、生きる姿勢を見せなければいけないはずの大人（教師）が、将来を担う子供達に、人間の醜い心を助長させているようなものでありましょう。一体どうして、こんなに「恥も外聞もない」大人達が育ってしまったのでしょうか？大人達は「今の若い者は…」等と愚痴をこぼします。まあ、確かにそうです。しかし子供は大人の背中を見て育ちます。根っからの悪という子供は存在しません。生まれた時はみんな純粹無垢です。そんな真つ白な子供の心に色を染めていくのは、私達大人であります。だとすれば、犯罪の絶えない昨今の世相を嘆く時、私達大人がシッカリとフンドシを締め直さなければいけないのではないのでしょうか。

まあ考えてみれば、子を持つ親の心は、分別がないわけではありませんが、子供の事を思うと、闇夜の道に迷うように、思い迷ってしまう事も多々あります。「親バカ」といわれても、我が子を案じるあまり判断力を失ってしまうのが、いつの時代も変わらぬ親の姿です。

現代には「モンスター・ペアレント」と呼ばれる親たちが世の中を闊歩しています。先日まで「モンスター・ペアレント」というテレビドラマが放映されていましたが、私はそのドラマを観ながら考えさせられました。親にとってみれば、子供が過不足無く、幸せな人生を歩んでもらいたいとの一心で、学校へ何だかんだと要望しているだけなんです。まさか自分が「モンスター・ペアレント」という存在になっているなんて事は、露も思っていないわけです。しかし学校とても、子供に対する思いは同じであります。それに学校には「校則」というルールがあります。そのルールに従えないのであれば、そもそも学校に來てもらっては困るという事になります。親は良かれと思っていることが、子供にとってみれば、学校と親の間で板挟みになり、1番辛い思いをして苦しんでいるんじゃないでしょうか？相手のことを考えて、行動することは非常に難しいのであります。

皆様ご存じでしょうか？学校教育の柱には「学習指導要領」なるものがあります。この学習指導要領、昭和22年に改訂されたのですが、そこには驚くべき1文があります。

「これからの国語教育は古典の教育から解放されなければならない」と盛り込まれたので、この1文によって日本の子供達は、代々受け継がれてきた美しい日本語を学ぶ機会を奪われてしまったという日本の歴史があります。「古典」と言えば、我々祖先の血が通った歴史そのものです。その歴史を否定するような1文が盛り込まれてしまったのです。実はこの改訂にあたって、裏で働きかけていたのが占領国アメリカ力でした…。彼等には、優秀な日本人の精神を崩壊してしまおうという思惑が隠されていたのです。一方、「古典」という日本の歴史を奪われた日本人は、それから10数年経過した昭和三十年代後半に、アメリカの思惑通りに、暗雲がたちこめてきました。

そのころ教育界では、「古典教育からの解放」に加えて、「教育の主役は子供達であり、教師を仰ぎ見るのはおかしい」、「卒業証書は校長が上から手渡すものではない」という風潮が蔓延していったのです。子を思う親の心…なんと皮肉なものでしょうか…。「モンスタ・ペアレント」は、今にはじまったことではなかったのです。

心の柱を失った日本人は、その場限り、場当たりのな考え方、つまり合理主義や、弱肉強食を振りかざし、「自分さえ良ければそれでよし」という「格差社会」は、その頃にはスタートしてしまっていたのです。言葉というのは「言霊」と申しまして、言葉を発する人間の、人格をも形成すると言われております。戦後アメリカ流合理主義によって得た物質的な豊かさとは裏腹に、精神的には貧困の度を深め、それが昨今の荒廃した世相をもたらしてしまいました。ここにきて私達は、真剣に考える時がきました。考えるとは、「智慧を絞り出す」という事であります。この「智慧」が、私達の抱える諸問題を、明るく解決の道へと導いてくれるはずです。「恥の文化」を忘れ、「品格」のない、言わば日本人らしくない日本人が増えすぎました。合理主義が蔓延すれば、お互いの足の引つ張り合いが絶えなくなります。聖徳太子の定められた十七条憲法にあるように、「和を以て貴しと為す」という精神を改めて身体に刻まねばなりません。「恥の文化」には、「お天道様」という私達の力ではどうしようもない大自然の恵みに対して、感謝し、畏敬の念を抱き、「生かされている」事を実感することにあるとしました。ようやく世界は、21世紀に入り自然克服型、浪費型の社会から、自然共生型、節約型の社会へと大きく舵を切りつつあります。日本はこの転換期を待つまでもなく、昔から常に自然と共生し、物を大切に生きてきた民族です。そんな日本人だからこそ、**精神面で日本人が世界のリーダーたらん時**であります。どうか、目に見えないものへ畏敬の念を抱き、諸問題に対しては「智慧」を絞り出し、智慧の蔵から出る言霊で人を幸せにすることに心がけ、善悪で物事の判断をして頂きますことを祈念致します。

合掌 副任職 谷川寛敬